学習システム促進研究センター
『学習システム研究』第 6 号 2017（pp.13-23）

「真正な実践」のための歴史教材研究

－中学校社会科歴史単元「藤原道長に返歌を送ろう」を事例にして－

宮本 英征

本共同研究の目的は，研究者が進める研究における学びを，各教育における子どもたちの学びに転用・活用するために，研究者の学びを「真正な実践」として究明することである。本稿では，歴史学者が歴史学者の論文・著書を読み解くことで，「真正な実践」として研究者の学びを抽出し，それを歴史教師が行う教材研究やその開発研究にどのように応用できるのかを明らかにする。

そのため，朧谷（2012）『さかのぼり日本史⑨　平安　藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』を対象とし，文章的，構造的，レトリック的な読解を行い，「真正な実践」としての研究者の学びを抽出した。そして，歴史教師である筆者がその研究者の学びをどのように活用することができるのかを考察したのち，中学校社会科歴史単元「藤原道長に返歌を送ろう」をどのように開発し，それを活用したかを説明した。

この結果，歴史教師が行う「真正の実践」のための歴史教材研究は，歴史学者の学びそのものを生徒の学びに転換することができるが，しかし，歴史教師が市民的資質を育成しようとする場合には，歴史学者の学びを反省的に生徒自身の学びへと転換する必要があることを明らかにした。

キーワード：歴史学者，真正な実践，歴史教師，歴史教材研究，市民的資質

Study on History Teaching Materials for “Authentic Practice”:

Case Study of a Teaching Unit in Junior High School Social Studies, History, “Let’s Compose an Ode in Reply to Fujiwara no Michinaga”

Hideyuki Miyamoto

This joint research aims at understanding learning by a researcher as an “authentic practice” in order to covert and utilize the researcher’s learning in his or her research into learning by children at each school. In this paper, the author clarifies how a historian extracts learning by a researcher that constitutes an “authentic practice” by interpreting academic papers and books of other historians and how the learning can be applied to research of teaching materials and development research thereof by history teachers.

To achieve the goal, *Sakanobori Nihonshi 9: Heian: Fujiwara-shi wa naze kenryoku wo mochitsuzuketanoka* (*Retrospective history 9: Heian: Why the Fujiwara clan was able to sustain its power*) written by Oboroya (2012) was interpreted in terms of sentence, structure and rhetoric; and learning by a

researcher that constituted an “authentic practice” was extracted. The author, who is a history teacher, discussed how the learning by the researcher could be used and explained how a teaching unit in junior high school Social Studies, History, “Let’s compose an ode in reply to Fujiwara no Michinaga” was developed and utilized.

As a result, it was clarified that research of history teaching materials by a history teacher toward “authentic practice” can convert the learning by a historian into learning by students but the learning by a historian needs to be reflectively converted into learning by students when the history teacher attempts to cultivate citizenship.

Keywords: Historian, Authentic Practice, History Teacher, Research of History Teaching Materials, Citizenship

１．問題の所在

本研究の目的は，研究者が進める研究における学びを，各教育における子どもたちの学びに転用・活用するために，研究者の学びを「真正な実践」として究明することである。

本稿では，歴史学者が作成した論文・著書を読み解くことで，研究者の学びを「真正な実践」として抽出し，それを歴史教師が行う教材研究やその開発研究に応用する場合を取り上げる。すなわち，歴史教師が単元を開発するとき，歴史学者が作り出した関連論文や著書を読解するが，この読解過程を教材研究とし，論文や著書の読解をどのように進めるのか，また，歴史学者の論文や著書の読解で得たものを歴史教師がどのように転換し，生徒の学びの論理として構築するのかを明らかにする，ということである。

２．中学校社会科歴史単元「藤原道長に返歌を送ろう」の教材研究

本研究における単元の開発は，中学校１年の歴史的分野の学習内容である「摂関政治」について探究するものにした。

まず，教材研究のための文献を収集した。特に，平安時代，摂関政治，藤原道長をキーワードにして調査し，歴史学の論文や専門書などの研究書だけでなく，小説や漫画，映像なども対象とした。

そして，教材研究として研究書や小説，漫画を読解した。その結果，摂関政治に直接関係し，生徒にとっても身近である藤原道長への評価に着目した。道長の評価は三つに整理できた。一つは，道長の摂関政治を評価するものである。代表的な文献として古瀬(2011)『摂関政治』がある。二つは，道長の運の良さを強調するものである。永井（1986)『この世をば〈上〉〈下〉』が代表的なものである。三つは道長の外戚政策と権力掌握の長期化を評価するものである。代表的なものが朧谷（2012)『さかのぼり日本史⑨　平安　藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』である。

３．歴史教師による『さかのぼり日本史⑨　平安　藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』の読解

本章では，歴史教師である筆者が教材研究として，読み解いた朧谷（2012)『さかのぼり日本史⑨　平安　藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』（以下，本書と略する。）を取り上げ，本書をどのように読み解いたのかを明らかにする。そうすることで文献読解とその活用の仕方を明らかにすることができるからである。

そのために，以下では，本書の読み解きを（１）文章的読解，（２）構造的読解，（３）レトリック的読解の三つの視点から考察する。

（１）文章的読解

本書は「はじめに」と四つの章で構成され，各章は小項目に分かれている。その章節は次のようになっている。

はじめに
第１章　摂関家の危機
—1156 年（保元元年）
藤原史を知れば日本史が見える
「院政」という新たな政治システム
院との歴然たる力の差
復帰した忠実と親子の確執
皇位継承をめぐる対立
保元の乱の危機を乗り越えて
第２章　藤原道長の栄華
—1018 年（寛仁２年）
望月の欠けたることもなし
強運の持ち主・道長
道長のとった前代未聞の戦略
なぜ外戚に執着したのか
道長なくして『源氏物語』は生まれなかった
第３章　権力独占への道
—901 年（延喜元年）

稀代のエリート学者・菅原道真
転機となった「阿衡の紛議」
権門の時平，寒門の道真
「謀反」は本当にあったのか
他氏排斥後に残されたもの
第 4 章　摂関政治の誕生
—866 年（貞観 8 年）
不穏な世情のなかで台頭した北家
冬嗣と良房の婚姻戦略
天下の政を摂行せよ
藤原氏が千年の歴史を保ちえたわけ

本書は，平氏政権前，道長，良房，藤原北家の成立と時間をさかのぼっている。

各章や小項目の読解は表 1 のように行った。小項目の内容から著者の Q（問）を導き「小項目の Q」とした。また，各章全体の内容から導いた著者の問を「各章の Q」とした。そして,本書全体における著者の MQ を導き「本書の MQ」とした。

歴史教師はこのように各章の小項目の内容と小項目における著者の Q を読解し，各章全体の内容を理解し，著者の Q や本書全体の MQ を導き出すことができる。

「はじめに」では，結果を提示したうえで歴史をさかのぼる形でその原因を探っていくという手法で平安時代史，特に「藤原史」の世界を紐解くことにあるという本書の目的を述べている（朧谷，2012，p.1）。このことから「はじめに」において，歴史教師は著者の Q「本書を書く目的は何か」を導き出す。

第 1 章「摂関家の危機」では，小項目の内容から，院政による摂関政治の危機や保元の乱による藤原氏の内部対立に対応し，藤原忠実が貴族社会のリーダーとして儀式を受け継ぎ，有職故実の担い手として藤原一族の存在価値を保ったこと，その結果，藤原氏の文化が「日本文化」の基盤となっただけでなく，近衛文麿など藤原氏が近代以降にも相当な影響力を発揮する局面があったことを第 1 章の内容として理解する。また，このことから，第 1 章の Q として「藤原忠実は摂関家としての危機をどのように克服したのか」を導き出すことができる。

第 2 章「藤原道長の栄華」では，小項目の内容から，強運の持ち主であった藤原道長が甥伊周の失脚により藤原北家の当主となり，権力を握る。そして，兄道隆の娘定子が嫁いでいた一条天皇に，道長の娘彰子も嫁がせるという前例のない 1 人の天皇に「二后並立」を行うなどして外戚の地位を確実にした。また，自分の外孫に娘を嫁がせるという当時でも尋常ではない方法により，なるべく長い期間，息子頼通や藤原家が外戚として力を持ち続け摂関家として君臨できるようにした。この結果，藤原家が摂関家として朝廷や貴族社会のリーダーになることができたという第 2 章の内容を理解する。また，このことから，第 2 章の Q として「なぜ，藤原道長が朝廷や貴族社会のリーダーへと上り詰めることができたのか」を読み取ることができる。

第 3 章「権力独占への道」では，小項目の内容から，藤原時平や実頼など藤原北家が権力を独占できたのは，宇多天皇に信頼された菅原道真や醍醐天皇の子源高明を大宰府に左遷したように，天皇家と外戚関係を結び，また，結ぶ可能性のある有力な他氏を政略や陰謀によって権力の中枢から排斥することに成功し，摂政や関白に就任できたためである，という第 3 章の内容を理解する。このことから，第 3 章の Q として「なぜ藤原時平が権力を独占できたのか」を導き出すことができる。

表１　本書の文章的読解

章	小項目の内容	小項目のＱ	各章 のＱ	本書の MQ
はじめに			本書を書く目的は何か	藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか
第１章 摂関家の危機 —1156 年 (保元元年)	藤原史を知れば日本史が見える	藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか	藤原忠実は摂関家としての危機をどのように克服したのか	
	「院政」という新たな政治システム	摂関を独占する藤原氏の前に立ちはだかったものは何か		
	院との歴然たる力の差	院政はどのくらい力があったのか		
	復帰した忠実と親子の確執	藤原氏はどのような対立に直面したのか		
	皇位継承をめぐる対立	天皇家はどのような対立に直面したのか		
	保元の乱の危機を乗り越えて	保元の乱の危機をどのように乗り越えたのか		
第２章 藤原道長の栄華 —1018 年 (寛仁２年)	望月の欠けたることもなし	権力の絶頂期であった藤原道長の心中はどのようなものだったのか	なぜ，藤原道長が朝廷や貴族社会のリーダーへと上り詰めることができたのか	
	強運の持ち主・道長	なぜ，道長は摂政になることができたのか		
	道長のとった前代未聞の戦略	道長が権力の座を固めるためにとった前代未聞の戦略とは何か		
	なぜ外戚に執着したのか	なぜ，外戚に執着したのか		
	道長なくして『源氏物語』は生まれなかった	道長の繁栄は何をもたらしたのか		
第３章 権力独占への道 —901 年 (延喜元年)	稀代のエリート学者・菅原道真	排斥された菅原道真はどのような学者だったのか	なぜ藤原時平が権力を独占できたのか	
	転機となった「阿衡の紛議」	道真が注目される転機となった事件は何か		
	権門の時平，寒門の道真	なぜ，時平と道真は対立したのか		
	「謀反」は本当にあったのか	時平はどのように道真を排斥したのか		
	他氏排斥後に残されたもの	他氏排斥後の権力闘争は何か		
第４章 摂関政治の誕生 —866 年 (貞観８年)	不穏な世情のなかで台頭した北家	なぜ，北家が台頭できたのか	藤原良房はなぜ摂政になることができたのか	
	冬嗣と良房の婚姻戦略	藤原冬嗣と良房はどのように勢力を拡大したのか		
	天下の政を摂行せよ	なぜ，良房が摂政になることができたのか		
	藤原氏が千年の歴史を保ちえたわけ	藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか		

※筆者作成。

第 4 章「摂関政治の誕生」では、小項目の内容から、藤原冬嗣・良房親子が積極的に天皇家との姻戚関係を拡大した。そして、応天門の変で混乱する朝廷において、清和天皇が皇族しか就任できなかった摂政に祖父良房を就任させた。天皇家以外の、臣下として史上初めての摂政が誕生したのは、天皇あるいは天皇制の危機という要素が、藤原氏が摂政として国政に深く関与することを求めたためである、という第 4 章の内容を理解する。また、このことから、第 4 章の Q として「藤原良房はなぜ摂政になることができたのか」を読み取ることができる。

以上のように各小項目の Q，各章の Q を読解し，最終的に本書の MQ「藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか」を導き出した。

このような文章的読解により歴史教師は著者の問を著者の学びとして読み解くことができる。

（２）構造的読解

本書の各章はどのような関係になっているのかをここでは読み解く。「はじめに」は本書の目的であり，藤原氏の歴史をさかのぼることを提起している。そして，第 1 章では，藤原氏が摂関家として影響力を維持した原因として，藤原忠実が朝廷における儀式や作法などの有職故実を形作り，藤原家が社会的文化的な模範・秩序の担い手になったことを取り上げているように，有職故実を藤原氏の社会・文化的な優位を維持する摂関政治の特徴として説明している。第 2 章では，藤原道長による「二后並立」や「一家三后」などの外戚政策と権力掌握の長期化による摂関家の栄華について取り上げ，外戚の拡大を藤原氏の政治的優位を確立する摂関政治の特徴として説明している。第 3 章では藤原時平による菅原道真の左遷や藤原実頼による源高明の左遷など他氏排斥により権力を独占した藤原氏の争いを取り上げ，他氏の排斥を藤原氏の政治的優位を伸長する摂関政治の特徴として説明している。最後に，第 4 章では，混乱する朝廷が臣下である藤原良房に初めて摂政就任を承認したことが，藤原北家の権盤となったことを取り上げ，摂政誕生を藤原氏の政治的優位を基礎づける摂関政治の特徴として説明している。

この結果，著者（朧谷）は図 1 のように，第 1 章で有職故実，第 2 章で外戚の拡大，第 3 章で他氏の排斥，第 4 章で摂政の誕生を藤原氏の社会・文化・政治的優位をもたらした摂関政治の構造として取り上げ，本書全体で摂関政治という歴史概念を説明していると読み解くことができる。

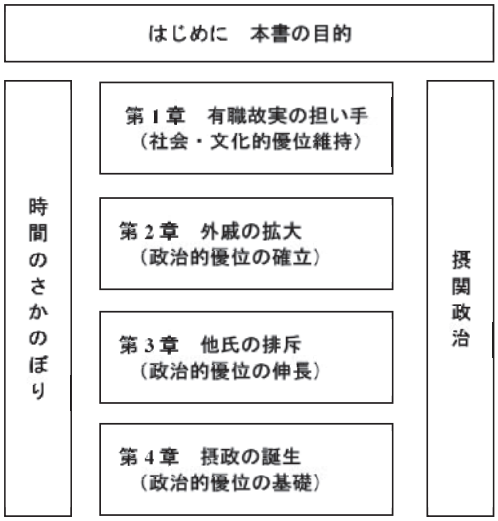

図１　章立ての構造

※筆者作成。

以上のような構造的読解により，歴史教師は，歴史概念としての摂関政治に関する著者の概念理解を著者の学びとして読み解くことができる。

（３）レトリック的読解

ここでは摂関政治という歴史概念を説明する際，著者がどのような歴史の説明の方法を行っているかを明らかにする。

代表的な歴史研究書（古瀬（2011）『摂関政治』や坂上（2015）『摂関政治と地方社会』）では，藤原氏の摂関政治については時系列的に特色を説明するため，摂政誕生という原因が他氏排斥という結果をもたらす，そして，他氏排斥が原因となって外戚の拡大という結果となるような構造になる。つまり，摂関政治の出発点（原因）は摂政，関白という職を獲得したことであり，天皇の身近な皇親家ではなく，臣下でこの職を得たことにより，政治的優位さを獲得したというものである。この場合，著者は原因と結果の因果関係で歴史を説明している。

しかし，本書は，結果である有職故実の継承者から原因である外戚拡大，結果である外戚拡大から原因である他氏排斥，結果である他氏排斥から原因である摂政誕生について説明している。この説明には，藤原家から作られる近衛家・九条家に代々引き継がれる有職故実の継承，つまり，過去の先例や公私にわたる行動の根拠・規範に関する知識を体系的に受け継ぐことで，政治や社会・文化に関する行動を優位にしたという点を新たに指摘している。このように，本書の著者は結果から原因を探究するという手法で歴史を説明するとともに，従来の政治的理由だけではなく，社会的文化的理由をも付け加えている。著者は歴史的出来事の因果関係の原因を新たに探究することで，歴史学の手法を用いるとともに，新たな説明もしている。

レトリック的読解により，歴史教師は，歴史学者の研究方法を著者の学びとして読み解くことができる。

（４）本書の読解のまとめ＝読解としての教材研究

歴史教師は，文献を文章的に読解し，著者の問を著者の学びとして読み解くことができる。また，構造的に読解し，著者が説明しようとしている歴史概念を著者の学びとして読み解くことができる。さらに，レトリック的な読解によって，歴史学における著者の研究方法を著者の学びとして読み解くことができる。このことから，歴史教師は論文や著書を文章的，構造的，レトリック的の三つの視点で読解し，著者の学びを把握する。このように文献を読解し，著者の学びを把握することが読解としての教材研究であり，そうすることで研究者の学びを「真正な実践」として抽出することができる。

４．教材研究から単元開発へ：単元「藤原道長に返歌を送ろう」の場合

本章では,歴史教師が単元を開発するとき，著者の学びをどのように学び取り，どこをどのように学習者の学びに転換するのかを明らかにする。

前章で「真正の実践」として読み解いた朧谷の学びは文章的，構造的，レトリック的な読解に即応して，学びの三つの段階に区別できる。歴史教師が，朧谷の学びそのものを生徒の学びへ転換する場合，レトリック的な学びから藤原氏の権力伸長の原因を探究する単元を考える。また，構造的な学びから藤原氏の権力伸長の原因を摂関政治の構造に基づいて考える。そして，文章的な学びから単元のMQを「藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか」として組織する。このように参考にする著者や論文の著者である歴史学者の「真正の実践」そのものに依拠する教材研究の場合，単元は歴史学者の学びを学習する歴史学に基づくものになる。

一方で，歴史教師である筆者は，歴史教育は市民的資質を育成するものであると考えている（宮本，2016）。筆者の定義する市民的資質は,（１）歴史に関する記述や語りには価値観が結びつく，そのため（２）私たちは歴史を学ぶことで無意識に他者の価値観に影響を受ける，その結果,（３）歴史に結びつく価値観を反省し，判断することで，生徒自身が歴

史を記述したり語ったりできるようになるという資質である（宮本，2016）。

このため朧谷や他の歴史学者が歴史をどのように学んだのかという学び方を相対化させ，著者が藤原氏や摂関政治をどのように評価し説明しているか生徒が反省できるようにする。

この結果，歴史教師である筆者は「真正の実践」として行った文献の読み解きを生徒も行えるように単元を開発しようとする。

（1）中学校社会科歴史単元「藤原道長に返歌を送ろう」の単元構成

第 2 章で取り上げた古瀬（2011），永井（1986），朧谷（2012）の文献を読解し，著者の学びを生徒が反省して学べるように，目標を以下のようにした。

①摂関政治における権力者として藤原道長を説明するだけではなく，道長の平凡さなどの人間性を踏まえ，肯定的あるいは否定的にそのイメージを判断し，生徒自身の道長像を語ることができる。

②「望月の歌」についての歴史学者など他者の語りを分析することで，道長に多様なイメージが結びつくことに気がつかせる。他者による語りは教科書だけでなく，漫画や小説など日常生活において生徒が歴史を認識するものを扱う。

③藤原道長に対するイメージを判断し「望月の歌」に対する返歌を作成し班やクラスに発表する。

そして，表 1 のように 3 時間の単元を構成した。1 時間目前半では，教科書に示された和歌「この世をば」からイメージした生徒の道長像を確認し，マンガ（山本，2015，pp.162-163）に示される道長を提示する。そして，マンガを描いた作者の道長のイメージをトゥールミン図式によって読み解かせる。ここでは，漫画と同様に道長の摂関政治を評価する図（古瀬，2011，pp.46-48）を資料として提示し，道長が内覧と左大臣を兼任するという権力掌握のために効果的な選択をしただけでなく，摂関や内覧の政治力を高めようとしたことなどから，道長の優秀さや政治力の高さを評価する古瀬のイメージを漫画に結びつけて考えさせる。後半では，永井路子『この世をば〈下〉』のにおける和歌「この世をば」を読み上げる場面（永井＜下＞，1986，pp.451-455）を朗読させ，作者がどのように道長をイメージしているか，トゥールミン図式を用いながら読み解かせる。作者が照れながらよみあげる道長を強調していることを分析する。そして，道長が二人の兄の偶然の死によって家長になれたことなど道長の運の良さを実感させ，小説の作者がイメージする道長像を考えさせる。作者が運のよい人物としてイメージしていることなどを生徒から引きだす。

2 時間目前半は道長が和歌「この世ば」を詠んだ時期が摂政就任や長女の入内でもなく，三女威子の入内の時であった理由を考えさせる。そして，著者の見解をトゥールミン図式で分析する。著者が外戚の地位を確立する道長を強調していること，作者が，息子への心配や優しさ，藤原家を心配する道長のイメージを持っていることを生徒から引き出す。後半では，これまでの学習した多様な道長像を踏まえ，藤原実資になって「この世をば」に対する返歌を考えさせる。

3 時間目前半では，各自が作成した返歌をグループで発表させ，各グループで良いものを選びクラスで紹介する。そして，各自が創った返歌に結びつく道長像を再度確認し，道長に多様なイメージを結びつけ，自分たちも道長について説明することができることを学んだことを本単元のまとめとする。後半では，藤原道長をどのような人物だと思ったかについて，アンケートに答えさせる。

表２　中学校社会科歴史単元「藤原道長に返歌を送ろう」の単元構成

過程		学習内容
1時間目	前半	○漫画の「この世をば」は道長について何を強調しているのか。 漫画の作者　この世をば （何を強調しているのか。） 摂関政治の頂点を現出した様子 ○道長を摂関政治の頂点として強調することで，漫画の作者は道長をどのような人物としてイメージしているのか。 漫画の作者　この世をば 摂関政治の頂点 （作者の道長のイメージはどのようなものか） 政治力のある，優秀な人物
	後半	○小説の「この世をば」は道長について何を強調しているのか。 漫画の作者　この世をば （何を強調しているのか。） 照れながらよんでいる様子 ○照れながらよんでいる様子を強調することで，漫画の作者は道長をどのような人物としてイメージしているのか。 漫画の作者　この世をば 照れながらよんでいる様子 （作者の道長のイメージはどのようなものか） 運のよい，平凡な人物
2時間目	前半	○論文の「この世をば」は道長について何を強調しているのか。 論文の作者　この世をば （何を強調しているのか。） 1人の天皇に「二后並立」や「一家三后」などの外戚政策と権力掌握の長期化を喜ぶ様子 ○外戚政策を強調することで，漫画の作者は道長をどのような人物としてイメージしているのか。 論文の作者　この世をば 1人の天皇に「二后並立」や「一家三后」などの外戚政策と権力掌握の長期化 （作者の道長のイメージはどのようなものか） 息子頼道や藤原家の行く末を案じる優しい人物である
	後半	○藤原実資となって「この世をば」への返歌を考えよう。
3時間目	前半	○各自で考えた返歌を班で発表しよう。
	後半	○藤原道長をどのような人物だと思ったか，アンケートに答えよう。

※筆者作成。

（２）歴史教師による著者の学びの活用

歴史教師である筆者は，歴史学者など他者の学びの成果に基づく藤原道長の様々なイメージを反省し，生徒自らのイメージを語ることができるように本単元を構想した。そのため第 2 章で示した文献を第 3 章のように文章的，構造的，レトリック的に読解し，著者の学びを反省できるようにした。

筆者は著者の学びを生徒にさせるために，著者の学びを生徒の学びへ転換している。例えば，本単元の 2 時間目前半では『さかのぼり日本史』の第 2 章「藤原道長の栄華」における著者の学びを生徒に反省させた。この場合，著者のレトリック的な学びである藤原北家が貴族のリーダーとなった原因を政治的，社会・文化的に探究するという歴史学の学び方を反省し，歴史は記述や語るものであるという歴史学の学びを生徒が学べるように転換した。また，構造的な学びである摂関政治の構造としての「外戚の拡大」を著者の解釈として反省し，歴史学者は藤原道長による摂関政治について多様に解釈するという学びに転換した。そして，文章的な学びである「藤原道長は 1 人の天皇に「二后並立」や「一家三后」などの外戚政策の拡大と権力掌握の長期化に成功した」とその内容から導いた Q「なぜ，藤原道長が朝廷や貴族社会のリーダーへと上り詰めることができたのか」を著者の学びとして反省し，一人の歴史学者のイメージや価値観として学べるように転換した。

以上のような著者の学びを活用し生徒の学びへと転換する方法を示したのが表 3 である。授業では，本書の第 2 章の内容と Q「なぜ，藤原道長が朝廷や貴族社会のリーダーへと上り詰めることができたのか」という著者の学びを中心的に活用した。筆者は中心発問「この資料の作者は『この世をば』をうたった道長のどのようなイメージを強調しているのか」を組織し，本書『さかのぼり日本史』そのものを資料として生徒に提示した（朧谷，2012，pp.50-52）。そして，著者が 1 人の天皇に「二后並立」や「一家三后」などの外戚政策と権力掌握の長期化を喜ぶ道長の様子について強調していることを探究するようにした。また，この発問に基づく学びを生徒が興味を持って取組むように，導入発問「藤原道長が『この世をば』を詠んだのはどの時期だろう」を組織し，道長が三女威子の入内の時に和歌をよんだことに注目させ，関心をもたせるようにした。この発問は著者の学びへの生徒の興味付けのためのものである。さらに，発展発問「作者は，なぜ，自分の息子や藤原家が長く

表３　本単元２時間目前半への著者の学びの活用

	歴史教師による発問	著書の学び
導入	【導入発問】 ○藤原道長が「この世をば」を詠んだのはどの時期だろう。	著者の学びへの興味づけ。
展開	【中心発問】 ○この資料の作者は「この世をば」をうたった道長のどのようなイメージを強調しているか。	著者の学び。 「なぜ，藤原道長が朝廷や貴族社会のリーダーへと上り詰めることができたのか」
終結	【発展発問】 ○作者は，なぜ，自分の息子や藤原家が長く天皇のおじいさんになれることを喜んだ道長を強調したのだろう。	著者の学びを相対化して，生徒自身の学びへ発展。

※筆者作成

天皇のおじいさんになれることを喜んだ道長を強調したのだろう」を組織した。中心発問による著者の学びを基に，著者の道長のイメージを考えさせるようにした。著者の学びを相対化，生徒自身の学びへと発展させるようにした。

まとめると，教材研究から単元を開発する場合，第 1 に，文章的，構造的，レトリック的に著者の学びを「真正の実践」として読み解き，著者の学びそのものを生徒の学びへ転換する方法と歴史教師の教育目標に基づいて著者の学びを反省し，生徒の学びへ転換する方法がある。第 2 に，著者の学びを反省的に生徒の学びに転換するためには，歴史教師自身が発問を組織する。第 3 に，その発問は著者の学びを生徒に学ばせる中心発問，著者の学びに興味を持たせる導入発問，著者の学びを発展させ，生徒自身が学ぶ発展発問に区別できる，ということである。

５．研究の小括

本研究では，歴史教師は教材研究として歴史学者の著書や論文を文章的，構造的，レトリック的に読解し，研究者の学びを「真正な実践」として示せることを明らかにした。文章的読解は各章の内容とその内容に対応した歴史学者の問を歴史学者の学びとして読み解く。構造的読解は各章の基本内容から章立てを構造化し歴史学者の歴史概念を抽出する。歴史学者による歴史概念の構築を学びとして捉える。レトリック的読解は歴史学者が基づく学問的な立場や著作の学問的意義を読み解き，歴史学者による歴史の学び方を学びとして把握する。

そして，歴史教師は教材研究として行った読解を単元の開発のために次のように活用することを明らかにした。

一つは，教育目標に従って歴史教師は歴史学者の三つの学びそのものを生徒の学びへ転換したり，反省的に生徒の学びへ転換したりする。

二つは，歴史教師は歴史学者の学びを反省的に生徒の学びへ転換する場合，単元を複数の歴史学者の学びで構成する。

三つは，歴史教師は歴史学者の学びを反省的に生徒の学びへ転換するために，単元開発において歴史学者の学びを活用して教師が発問を組織する。

四つは，歴史教師の発問は歴史学者の学びを生徒に学ばせる中心発問だけではなく，歴史学者の学びに興味を持たせる導入発問や歴史学者の学びを踏まえ，生徒自身の学びへ発展する発問を組織する。

この結果，歴史教師が行う「真正の実践」のための歴史教材研究は，歴史学者の学びそのものを生徒の学びに転換する。しかし，歴史教師が市民的資質を育成しようとする場合，歴史学者の学びを反省的に生徒自身の学びへと転換する必要があることを明らかにした。

参考文献

古瀬奈津子（2011）『摂関政治』岩波新書。

宮本英征（2016）「市民的資質を捉えるための世界史教育評価研究－導入単元『言説「帝国」を考える』を事例にして－」『社会科教育研究』129，pp.40-53。

永井路子（1986）『この世をば〈上〉〈下〉』新潮文庫。

朧谷寿（2012）『さかのぼり日本史⑨　平安　藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』NHK 出版。

坂上康俊（2015）『摂関政治と地方社会』吉川弘文館。

山本博文監修（2015）『角川まんが学習シリーズ　日本の歴史３』KADOKAWA。

著者

宮本 英征　広島大学附属中・高等学校